

# 坂本完春先生をお送りする

圓 月 勝 博

坂本完春先生は、引越し魔である。私が知るかぎりでも、先生の引越しの回数は5回を下るまい。あれは20年前のことである。右も左もわからぬ若輩者の私が同志社大学に就職させて頂く直前、大学教員としての心構えに関してご薫陶を受けるために、先生のお宅に招いて頂いたことがあった。西宮の高台にある見事な新築の邸宅であった。優しい奥様に案内して頂いて、マニエリスムの迷宮のような邸内に足を踏み入れた。邸内にはやたらに段差があり、上昇と下降を何度も繰り返したという身体的記憶だけがある。猫の額のような家にしか住んだことがなかった私が不安と驚愕にすっかり打ちのめされたとき、林立する書棚に膨大な書物が整然と並べられた<驚異の部屋>のごとき先生の書斎にようやくたどり着いた。今になって思い起こすと、あれはバロック効果を意図した建築学的趣向だったのかもしれない。呆然と立ち尽くしていると、窓の外に見える広大な庭から、庭の草花の手入れをなさっていた先生がハムレットの父親のように手招きをして私を呼んで下さった。やがて文学部長や教務部長などの要職に次々に就かれて、学内行政にも辣腕を揮われることになる先生だが、要職就任以前から王者のような風格が既に漂っていた。私が恐縮しつつ庭に出て行くと、「この庭が庭らしくするには、あと20年はかかるだろう」と先生は遠くを眺めながらおっしゃった。庭は人生の暗喩で、これから説教が始まるな、と身構えたところまではよかったが、眼下に広がる断崖絶壁を睥睨した途端、高所恐怖症の私の頭は真っ白になり、先生の有り難い庭の説教は、右の耳から左の耳に抜けていった。このときの無作法がたたり、爾来20年、私は先生の不肖の弟子として逸脱行動を繰り返

すことになる。それは身から出た錆だから一向に構わないのだが、まもなく先生があっさり引越しをなさったことがいまだに腑に落ちない。あの庭の草花はどうなったのだろうか。

「学者を目指す者は、良い本を読まなければならない」と大学院の最初の授業で、開口一番、先生は毅然とおっしゃられた。17世紀イギリス形而上詩人ジョン・ダンの作家研究の授業で、マニエリスムとバロックという言葉初めて聞いたのはそのときだった。指定された教科書は、ヘレン・ガードナー編纂のオックスフォード・イングリッシュ・テキスト版で、20余年前でも価格は1万円を優に超えていたと思う。重厚な濃紺のクロス装で、背中に金文字で書名が描かれており、本文は最高級の紙に気品ある活字がゆったりと並んでいた。先生の大学院の授業に出席するまで、このような高価で美しい学術書を自分が所有することになるとは夢にも見たことがなかった私は、家に帰ってからも、自分の粗末な本棚の特等席にその書物を置き、朝から晩まで眺め回していた。マニエリスムとバロックという未知なる言葉のオーラに包まれたダンの立派な書物に魅せられてしまった私は、ある日、勇気をふるって研究室にお邪魔して、先生の顔色をうかがいながら、独り言のようにつぶやいてみた。

「大学院ではダンについて論文を書こうかなあ、と・・・」

すると、先生は顔を窓の外に向けながらおっしゃった。

「ダンハカトリックからイギリス国教会へ移っていった人間だ」

会話が成立していないと訝られる向きも多いかと思うが、これが私たち二人の師弟関係の特徴で、話がはずんだという記憶が一度もない。とりあえず、非はすべて不肖の弟子たる私の無作法にあることにしておこう。しかし、私がこのエピソードを紹介している目的は、私の謙譲の美德を披露するためではなく、いつも先生の眼差しが外を向いていることに読者の注意を引きながら、あるものから別のものに移ることが先生の主要な知的関心らしいということとをそれとなくほのめかして、冒頭の引越しのエピソードをこれから取り

かかる先生の学問的業績の賞賛に強引に結びつけるためなのである。異質なものを強引に結びつける綺想こそ、先生にご指南頂いた形而上詩の真骨頂なのだ。

シェイクスピアを頂点にしてダンに至るイギリス・ルネサンス文学という英文学研究の王道を究められた先生の最大のご業績は、現代アイルランド詩人シェイマス・ヒーニーのご高訳である。過去と現在、中心と周縁、英語と日本語という異質なものを間然するところなく結びつけてしまわれるところが余人には真似のできない先生独自の学問的境地なのである。優れた学者であると同時に詩人でもあられた恩師、児玉実用先生の学統を継いで、青春時代からのご学友とともに地道に続けてこられた現代英語詩共訳活動は、そのご成果が単行本になって洛陽の紙価を高める機会に恵まれなかったことが大いに惜しまれるトム・ガンの翻訳作業などを経た後、『フィリップ・ラーキン詩集』（国文社、1988年）によってようやく一般読者にも知られるようになり、『シェイマス・ヒーニー全詩集1966～1991』（国文社、1995年）によってその決定的な結実を見ることになった。この画期的な共訳詩集の上梓が期せずしてヒーニーのノーベル文学賞受賞の朗報と重なったことは、現代英語詩翻訳に情熱を注いでこられた先生の長年にわたるご苦勞に報いようとする運命の神様の粋な計らいというものだったのであろう。この労作『シェイマス・ヒーニー全詩集』が、出版の翌年、第32回日本翻訳出版文化賞に輝いたことは、私たちの記憶にまだ新しい。

<デラシネ>という言葉がある。フランス語déracinéのことで、「根なし草になった」の意である。自らの起源であった文化の土壌と断絶することの痛みを経験した人間は、すべて<デラシネ>である。先生が後半生の学問的情熱を惜しみなく注がれたヒーニーは、北アイルランドに生まれ、祖国の悲惨な紛争を経験した後、アイルランド共和国に移り住むという苦渋に満ちた経歴を送ることになるが、自己の心の痛みを凝視することによって、この<デラシネ>の感覚を言葉によって深く掘り下げることを自らの責任として引き

受けた現代詩人である。〈デラシネ〉の感覚は、起源という神話が音を立てて崩壊した現代文化に生きる真摯な現代人なら誰でも持たずにはいられない自己認識であり、アイルランド問題という個人的な体験を多面的に語り続けたヒーニーが現代詩人として圧倒的な評価を受ける理由も、現代グローバル社会の通奏低音となった〈デラシネ〉の感覚を詩という最も研ぎ澄まされた文学形式の中で鮮やかに表現してみせた点にある。しかし、よく考えてみれば、〈デラシネ〉の感覚は、なにも現代人の専売特許ではない。たとえば、16世紀の宗教改革後、歴史の荒波に翻弄されて、自らの魂を神の愛に導いてくれると信じていたカトリック信仰を捨てなければならなくなったダンという17世紀イギリスの詩人には、凡庸な現代人など足元にも及ばぬ深刻な〈デラシネ〉の感覚が既にある。それぞれの登場人物が自己の存在基盤を問い続けるシェイクスピアの『ハムレット』の人气が現代になっても上がることはあっても下がることはない理由も、まさにこの〈デラシネ〉の感覚の卓越した劇的表現がこの悲劇の中にあるからにほかならない。枕頭にはシェイクスピアを常に置きつつ、授業ではダンを学生に熱く語り、書斎ではヒーニーと対峙してこられた先生は、この〈デラシネ〉の感覚を自己の存在の核として、ルネサンスから現代に及ぶ目が眩むような広大な文学的領土を軽やかに動き続けてこられたのである。

「〈デラシネ〉やのうて〈だらしねえ〉とほんまは言いたいんやろ」と先生はおっしゃりそうな気がする。不肖の弟子による最後の逸脱行動として、齒に衣着せず言わせて頂くが、碩学の風格を湛えた先生の唯一の欠点は、駄洒落の乱用であった。学生サーヴィスのおつもりだったようだが、耳を疑うような寒い駄洒落を連発なさって、意に反して教室を凍りつかせてしまわれる場面が数知れずあった。浮遊する言葉の戯れがマニエリスムあるいはバロック詩や現代詩の不可欠の要素であるという先生の学問的信念に異論を唱えるつもりは毛頭ないが、何事にも場所柄とか限度というものがあるだろう。これからは、大衆迎合的な駄洒落の乱用とは潔く縁を切って、先生の実り多き

大学教員生活を共に歩み続けて下さった優しい奥様の語り尽くせぬご苦勞を暖かくねぎらいながら、『水準器』(国文社, 1999年)に続くヒーニーの新作の翻訳をこれからも世に問い続けるためにも, そろそろお二人と一緒に心静かに腰を落ち着けられて, いつまでも変わらぬ仲睦まじさで第二の人生を末永く健やかに過ごして頂きたい。 <デラシネ>の師に対する<だらしねえ>弟子の最後のお願いである。